

■ミャンマー：ラオスのダム決壊事故で水力開発への反対が活発化

2018年11月8日付の現地報道紙によると、2018年7月にラオスで発生した水力ダムの決壊事故を受けて、ミャンマーで水力発電所の建設について反対が強まっている。2018年11月2日に開催された環境団体「Save the Salween」の会議に際して、環境保護の専門家は「現在ミャンマーには60カ所の水力ダムがあるが、環境影響の分析が十分でない。そのため、ダム事故が発生した際には下流に甚大な影響をもたらすおそれがあり、ダムの建設には反対」と発言した。この中で特に言及された建設中および計画中の案件は中国主導のMyitsone水力（7つのダム合計1,336万kW）、Mong Ton水力（711万kW）とノルウェー主導のBawgata水力（16万kW）の3案件である。